

看護学生と受持ち患児の母親との関係形成に向けた効果的支援の検討 — 母親とのかかわりの中で困惑した場面に焦点を当てて —

阿部 裕美¹, 佐藤佳代子¹, 合田 友美²

Discussion on Effective Support for Developing the Relationships between Nursing Students and Hospitalized Children's Mothers — Focused on the Cases in which Students were Faced with Difficulties in Interacting with Mothers —

Hiromi ABE¹, Kayoko SATO¹ and Tomomi GODA²

キーワード：小児看護学実習，看護学生，関係形成，困惑，支援

概 要

本研究の目的は、小児看護学実習において看護学生の受持ち患児の母親との関係形成に向けた支援方法を見出すことである。28名の看護学生の受持ち患児の母親とのかかわりの中で困惑した場面から困惑した内容に焦点をあて、内容の類似性からカテゴリー化を行った。分析の結果、【母親が抱く思い・ストレスに対する認知と対応】、【母親のネガティブな態度】、【看護学生の知識・経験不足】、【母親との言語的コミュニケーション】の4つのカテゴリーが抽出された。看護学生は母親とのかかわりに困惑しながらも、母親のおかれている状況や思いに近づき、自分自身を内省していた。そこで教員は、母親の抱く思いが患児の病状の変化とともに複雑に表出されることの意味を学生に問い、理解できるように導くことが必要である。そして、学生の知識の確認や援助の工夫を促し、学生が自信をもって不安なく看護を提供できるように配慮し支援していくことの必要性が示唆された。

1. はじめに

小児看護学では、子どもにとって家族は重要な存在として位置づけ、入院している患児の看護と同時に、付添っている家族特に母親を含めて対象を理解し看護していく必要がある。また、小児看護学実習においては講義で学んだ知識や技術を活かしながら、患児や付添っている母親と直接かかわることにより、看護を考えなければならない。しかし、看護学生（以後、学生とする）は受持ち患児の母親との対応にかなりのストレスを感じていると報告され¹⁾、河合ら²⁾も付添いの母親に対する学生の思いに関して、すべての学生は母親あるいは患児とのコミュニケーションに不安を感じて

いと述べている。看護教育のなかで、臨地実習は人間関係を成立させるための学習としての役割も大きい。核家族化や少子化の中で育った学生は対人関係の幅も狭く、多様な子どもとのかかわり方や親子関係などを理解することが難しい状況にある。そのため、実際の指導場面においても、どのように患児と接していけばよいのか、その母親とのかかわりをもてばよいのかという不安や戸惑いを訴える学生は多く、良い関係がなかなか築けず結果として実習意欲を低下させ、学習成果に影響を及ぼすことがある。一方で学生と母親との関係がスムーズに形成され母親から患児の看護に有用な情報を多く得ることで、患児に個別性を配慮した看護を十分に提供できたケースもある。このように学生と患児、学生と母親の関係が看護実践や学習成果に相互に影響することから、学生が母親と良好な関係を結びながら看護援助を実践していくための支援が必要であると考えられる。これまでの先行研究³⁻⁵⁾においては、学生と患児がかかわるなかでの戸惑い場面を取り上げ、学生と患児の関係形成について影響する要因や

(平成23年10月19日受理)

¹川崎医療短期大学 看護科

²香川県立保健医療大学 看護学科

¹Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

²Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

グループ/ 期間	1週目					2週目					
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金	
Aグループ (6名)	テー オリ シ ョ ン	病棟実習					外来実習			NICU 実習	学内 カンファレンス
Bグループ (6名)		外来実習		NICU 実習	学内 カンファレンス	病棟実習					

図1 小児看護学実習計画

指導方法についての検討はされているが、患児の母親との関係形成に向けて困難をきたす要因の追求や具体的な支援方法の検討は見当たらない。このことから、教員は、学生が母親との関係づくりにおいてどのような場面でどんな内容に困惑しているのかを熟知し、効果的に支援することが不可欠である。そこで今回、短期の入院患児が多い病棟で小児看護学実習を行った学生が、受持ち患児の母親とのかかわりの中で困惑した内容を明らかにし、学生と母親との関係形成を促すための支援方法を見出すことを目的とした。

2. 小児看護学実習の概要

小児看護学実習は、3年次前期に開講の2週間2単位の实習であり、そのうちの5日間を小児病棟における実習としている(図1)。病棟実習では1人の受持ち患児を受け持って看護を展開し、その患児と付添う家族とも深く関わりながら小児看護学の実際を学ぶ。受持ち患児は、主に療養生活の援助が学べる幼児および学童を優先して病棟師長および教員が選定し、学生は受持ち対象児の中から各自の実習目標に合った患児1名を選んでいる。病棟実習での1グループの学生数は6名とし、原則として専任教員が常駐し、実習指導者(受持ち患児を担当している看護師)と協働して学生の指導に当たっている。

3. 研究方法

1) 調査対象および調査期間

A短期大学看護科に在籍し、小児看護学実習を履修した3年生103名に対する無記名の自記式質問紙調査で、実習終了後の2009年10月21日～28日に実施した。

2) 調査内容

質問紙の構成は、受持ち患児の背景(年齢、性別、受持ち期間、疾患名)と、受持ち患児の母親とのかかわりの中で困惑した場面とし、自由に記述してもらった。

3) データの収集と分析方法

研究者が研究調査の趣旨を説明して調査用紙を一斉に配布し、後日、所定の場所に投函する形で回収した。分析方法として、患児の背景については単純集計をおこない、受持ち患児の母親とのかかわりの中で困惑した場面の自由記述は、場面の中から困惑した内容に焦点をあててセンテンスを抽出・整理しコード化して、カテゴリーとサブカテゴリーに分類した。また、データ分析において信頼性・妥当性を高めるために、繰り返し3人の研究者が協議し検討をかさねた。

4) 倫理的配慮

本研究の目的・方法と研究協力は自由意志であり、拒否が可能であること、無記名であり、個人が特定されないこと、成績には影響しないことを保障する旨を文章と口頭で説明し、調査用紙の提出をもって同意を得たこととした。

4. 結果

調査の結果、103名中の86名から調査用紙を回収し(回収率83.5%)、そのうち28名から30場面についての記述を得たので、この28名を今回の研究対象とした。学生が受持った患児は、乳児9名(32.1%)、幼児15名(53.6%)、学童4名(14.3%)であった(図2)。平均受持ち期間は 3.96 ± 0.92 日であった。疾患は14疾患あり口唇口蓋裂が7名(25.0%)と最も多く、次いで肺炎が5名(17.8%)と手術を受ける患児や急性期の患児を受持つ学生が多かった(表1)。そして、困惑した場面から困惑した内容について46コードが得られ、11のサブカテゴリーからコード数の多い順に、【母親が抱く思い・ストレスに対する認知と対応】、【母親のネガティブな態度】、【看護学生の知識・経験不足】、【母親との言語的コミュニケーション】の4つのカテゴリーが抽出された(表2)。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、〈 〉はその記述内容を示す。

1) 【母親が抱く思い・ストレスに対する認知と対応】

このカテゴリーは、《母親の子どもへの思い》《母親

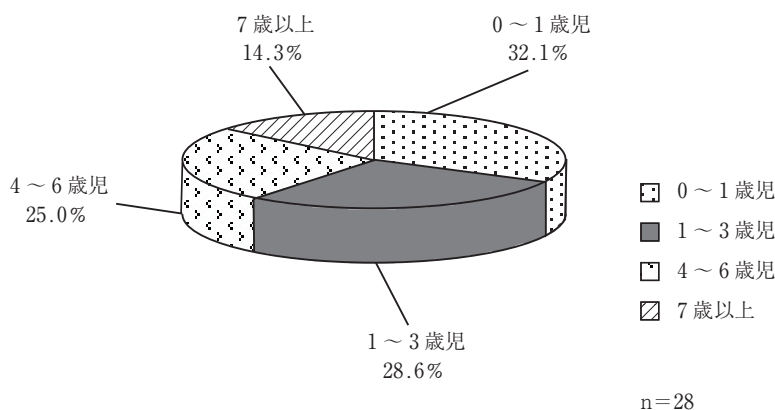


図2 受持ち患児の年齢区分

表1 受持ち患児の疾患名

n = 28

疾患名	人 (%)
口唇口蓋裂	7 (25.0)
肺炎	5 (17.8)
鼠径ヘルニア	3 (10.7)
気管支喘息	2 (7.1)
髄膜炎	2 (7.1)
腸閉塞	1 (3.6)
胃食道逆流症	1 (3.6)
漏斗胸	1 (3.6)
もやもや病	1 (3.6)
若年性関節リウマチ	1 (3.6)
睡眠時無呼吸症候群	1 (3.6)
滲出性中耳炎	1 (3.6)
峰窩織炎	1 (3.6)
ミルクアレルギー	1 (3.6)

表2 母親とのかかわりのなかで困惑した場面の内容

n = 28

カテゴリー	サブカテゴリー
母親が抱く思い・ストレスに対する認知と対応 (18)	母親の子どもへの思い (4)
	母親の不安 (6)
	母親の疲労 (6)
	医療者への思い (2)
母親のネガティブな態度 (12)	母親の不機嫌な態度 (6)
	母親の拒否的態度 (3)
	母親との隔たり (3)
看護学生の知識・経験不足 (9)	質問に対する対応 (6)
	母親の知識の豊富さ (2)
	母親の完璧な態度 (1)
母親との言語的コミュニケーション (7)	母親との会話 (7)

46コード、() はコード数を示す

の不安》《母親の疲労》《医療者への思い》の4つのサブカテゴリーから構成されていた。

学生は、急性の症状で入院した子どもを前に、「何もしてあげられない」「私が代わってあげたい」「気づいてやれなかった」など子どもを心配する様子や訴えなどを通して切なる《母親の子どもへの思い》や《母親の不安》を感じとり困惑していた。具体的場面としては、子どもの手術に同行する母親が子どもと離れた後、流涙される姿を目の当たりにして〈どのように声をかけていいかわからない〉と戸惑いを感じていた。そして、子どもが不機嫌でわがままを示す行動に戸惑う母親の姿や、24時間付きっきりで看病している姿をみることで母親の心身への負担の大きさに気づき、《母親の

疲労》を感じていた。さらに、子どもの入院が母親の情緒面に影響し、母親は常に医療者の言動や対応を敏感に感じており、「主治医からの説明がない」「看護師に頼んでもなかなか来てくれない」などが《医療者への思い》につながっていくことに気づき、学生は自らも求められるであろう医療者としての厳しい姿勢に強い緊張感を抱いていた。

2) 【母親のネガティブな態度】

このカテゴリーは、《母親の不機嫌な態度》《母親の拒否的態度》《母親との隔たり》の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

患児の病状が安定していない場合、母親の不安やストレスは高まり子どもを叱ったり、母親がイライラし

たりしているなどの《母親の不機嫌な態度》に学生は戸惑っていた。また、母親の疲労が重なり〈口数が少ない〉〈暗い表情をしている〉〈口調が厳しい〉〈無視される〉など《母親の拒否的態度》に不安を感じ、《母親との隔たり》を察しどのようにかかわったらよいか分からず躊躇していた。

3) 【看護学生の知識・経験の不足】

このカテゴリーは、《質問に対する対応》《母親の知識の豊富さ》《母親の完璧な態度》の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

学生は小児看護に関する知識と看護技術の不足や不安を抱きつつ実習に臨んでいることも多い。そのなかで子どもの病状を心配する母親から「病気の経過や今後の状態」を尋ねられたり、「退院後の生活で気をつけることは何か」と質問されたときに躊躇し、《質問に対する対応》の難しさを経験していた。また、家庭では母親が子どもの日常生活の世話をしているため育児経験も豊富で、母親から学生が指導されることもあり《母親の完璧な態度》に学生が萎縮したり劣等感を抱いたりすることで、やりがいを感じるができず《母親の知識の豊富さ》にかかわりづらささを感じていた。

4) 【母親との言語的コミュニケーション】

このカテゴリーは、《母親との会話》のサブカテゴリーで構成された。

学生は少しでも早く母親の思いを知り、看護援助につなげたいと考えているが、いざ母親を前にすると〈どのような感じで話をしたらいいのか〉〈どのタイミングで話しかけたらいいのか〉と会話を始めるきっかけが分からず不安な思いを抱いていた。また、母親と二人でいるときに会話が途切れたり、沈黙が続いたりすることに自分のコミュニケーション能力の未熟さを感じて戸惑っていた。

5. 考 察

短期の入院患児の多い小児病棟実習において、学生が受持ち患児の母親とかかわりの中で困惑した場面から具体的な内容が明らかとなった。そのうえで、母親との関係形成を促すための教育的支援方法について述べる。

1) 母親が抱く思い・ストレスに対する認知と対応

学生は患児に付添う母親とかかわるなかで、母親が子どもに対する愛情から苦痛を与えたくないという思いをもっていることを知り、さらに、母親が親としての役割を認識しながら子どもを支えようとする姿をみ

て、想像を超えた深い《母親の子どもへの思い》を感じとっていた。このように学生は、複雑な思いが絡み合った母親の心理状態を認知したがゆえに、どのように対応したらよいか戸惑い困難感を抱いていた。特に本研究の対象学生が受持った患児は手術後や急性期の症状で緊急入院をしたケースが多く、母親たちは子どもの身体的苦痛の大きさや情緒の不安定さを受け止めながら、親役割を果たさなければならない状況にあった。このような状況は学生にとって想像を絶するものであり、学生が母親から表現された思いに共感しながら患児とかかわり、適切な看護援助を実施することは容易ではないといえる。また、やや重症度の高い患児を受け持った場合、母親の不安やストレスはさらに増加し、学生への対応は余裕のないものとなり、それが学生の緊張感につながると予測される。そこで、教員は、母親の抱く思いが患児の病状の変化とともに一喜一憂しながら複雑に表出されることを意味を学生に問い、母親自身が援助を必要としている存在であることを理解できるように導くことが必要であるといえる。そして、子どもが入院することで付添う母親がどのような制約を受けているのか、母親が不在によることで家に残された家族の生活はどうなっているのかなど、家族全体の生活面にも目が向けられるよう促し、母親の疲労やストレスだけでなく、家族への影響など多方面の理解がすすむように指導していかなければならないと考える。

2) 母親のネガティブな態度

小児看護学実習において学生は、母親の存在を意識しすぎるがあまり、母親が示す表情、態度や行動を母親の学生に対する感情として敏感に受けとめる傾向にある。そのため、〈口数が少ない〉ことや〈暗い表情をしている〉ことが、母親との関係形成において不安を抱く要素になり得ることが示唆された。猪俣⁶⁾は、学生は緊張や遠慮という心理状況の中で、対象から好意的でない感情を持たれているのではないかと不安を持ち、この不安に自己を抑制していると述べている。このことから、学生が《母親の不機嫌な態度》や《拒否的な態度》など表面的な反応だけにとらわれるのではなく、母親の置かれている状況を適切に判断しながら、母親の複雑な心理状態をアセスメントできるように助言していくことが必要である。そして、特に不安の強い学生に対しては、教員が行動を共にすることで、学生が安心感をもって考え、行動できるように配慮することも重要である。また、実習期間が短く、時間的

制約のなかで学生は、少しでも早く看護上の問題や援助の必要性を見つけなければならないという焦りを少なからずもっている。そのため学生の一方的な行動や態度が強調され、それが結果的に母親との関係形成を困難にしている可能性があることを念頭におき、母親の態度の意味を学生が客観的に理解できるよう支援するとともに、学生が自らの行動や態度について振り返ることができるよう意図的に機会を設けることも効果的であると考え。また、母親は、指導者との信頼関係によって学生を積極的に受け入れ、子どもとのかわりを促進するなど実習指導の一環を担うようになる⁷⁾。このため、教員は母親との信頼関係を築き維持していくことが、学生と母親との関係形成における教育的支援であることを十分意識して早期から積極的に取り組むことが重要であるといえる。

3) 看護学生の知識・経験の不足

学生は受持ち患児の疾患の病態生理や看護について自己学習はしているものの、知識と患児の病状が十分結びつかないことも多い。そのうえ、子どもは病状が変化しやすいため、予測していない症状がみられたとき対応に戸惑うことがある。また、予期していない状況では、母親からの《質問に対する対応》が適切に行えない経験をする中で知識不足を感じ、信頼を得られない自分に焦りや不安を抱きやすい。そのため、まず受持ち患児の病態生理を正しく理解できるよう支援することが特に重要であるといえる。そして、学生が予測したことと現実との違いに気づくことができたときには、教員が適切に評価し承認を与えることも大切であろう。さらに、母親からの質問に対しては曖昧な知識で答えを返すのではなく、根拠に基づいた正しい知識で対応をすることで母親の信頼を得ることにつながることを解くことが望まれる。また、学生は未だ看護体験が少なく、日常生活でも乳幼児との接触が少ないうえに子育ての経験もほとんどない。このため学生には、受持ち患児に常に寄り添い日常生活の世話を実践している《母親の完璧な態度》から母親の存在が大きく映り、《母親の知識の豊富さ》に自信が無い学生は萎縮してしまっていた。しかし、親は学生の看護援助を実践する態度によって、初めて学生を信頼するようになる⁷⁾。そのため、患児への援助が安全で安楽に実施できるよう、教員は学生が立案した計画に基づいて具体的方法を確認したり、援助の工夫を促したりしなければならない。すなわち、教員は学生の知識の確認を行いながら、必要時は学生の側に付添い、学生が少

しでも自信をもち、安心して看護を提供できるように配慮し支援することが必要であると考え。また、学生が患児や母親に実施している看護援助をきちんと確認・評価し、タイムリーに学生へフィードバックすることで、新たな学びへの動機づけをおこなうことも教員の重要な役割であるといえる。さらに、江本ら⁸⁾は、カンファレンスは学生が困っていることや感じていることから、よりよいケアの方向性を見出したり、子どもや家族の理解を深めたりすることができる有効な学習方法の一つであると述べている。このことから、学生が母親との関係形成において困惑した経験を一人の学生だけの学びにとどめないよう、カンファレンスを有効に活用することが大切だと考える。

4) 母親との言語的コミュニケーション

学生は、〈どのタイミングで話かけたらいいいのか〉分からず、自分自身の言語的コミュニケーション能力の不足に焦りや不安を感じていた。また、〈無視されたら〉などと自分の存在を受け入れてくれるだろうかという想いが、より一層学生の不安を強くしていると予測される。そして、これらの不安が、患児やその母親にかかわろうとする学生の構えとなり、コミュニケーションの成立を困難にさせてしまっていると考え。しかし、コミュニケーションをとることは看護を展開するうえで重要である。特に受持ち患児が乳幼児であれば、言語的コミュニケーションをとることが難しいことから、母親とのコミュニケーションは欠かせないものとなる。母親の存在によって子どもへの援助をスムーズに実施できることも多いため、その重要性を学生自身が十分に理解し、言語的コミュニケーション能力を高めていくことが必要である。これらのことから、自分を受け入れてもらうことに主観をおいたり、受持ち患児についての情報を得ることだけを目的にしたりするのはなく、母親が患児の病気のことについてどのように思い、感じているのかという視点を忘れずコミュニケーションを図るように促すことが重要であるといえる。また、学生が言語的コミュニケーションの難しさを痛感している時には、教員がコミュニケーションのきっかけを作ることも大切な役割である。そして、学生が自分の言語的コミュニケーションのとり方を見つめ直せるように促し、効果的なコミュニケーションについて学ぶ機会にすることも重要であると考え。

6. おわりに

本研究結果より、学生が受持ち患児の母親とのかかわりのなかで困惑した内容が明らかになった。学生は母親とのかかわりに困惑しながらも、母親のおかれていた状況や思いに近づき、自分自身を内省することで小児看護の特性や専門性についての学びも得ていることが確認できた。教員は学生の母親理解が深まるように意識的に学生にかかわり、体験を共有しながら具体的な指導や助言をタイムリーに行い、学生が自信をもって母親との関係を形成できるよう支援していくことが必要である。また、学生がいつも安心感をもって考え、行動できるよう実習指導者との連携を図っていくことも重要である。今後は、学生が母親との関係形成のために意識して行動していることに焦点をあて、具体的な教育支援の方向性について検討していきたい。

7. 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました学生の皆様に心から感謝いたします。

なお、本研究は第10回国際家族看護学会学術集会において報告したものに、一部加筆・修正を加えたものである。

8. 文 献

- 1) 長瀬玲子：小児看護学実習を行う看護学生のストレスと児に付き添う母親のストレスとの関係—学生と母親への関わりに対する考察—, 日本小児看護学会第11回学術集会講演集：118—119, 2001.
- 2) 河合洋子, 堀田法子：小児看護学実習評価と実習直前・直後における学生の不安—2週間実習と3週間実習の比較—, 名古屋市立大学看護短期大学部紀要6：31—37, 1994.
- 3) 上村まや, 重松由佳子, 藤田稔子, 小野正子：小児看護学実習における困惑した場面の要因及び学びの分析—看護場面の再構成を通して—, 西南女学院大学紀要11：33—41, 2007.
- 4) 小代仁美, 榎木野裕美：小児看護学実習において看護学生がこどもとの人間関係の形成に向けて一歩踏み出すために影響する要因, 日本小児看護学会誌18(2)：9—15, 2009.
- 5) 小代仁美, 榎木野裕美：小児看護学実習において看護学生がこどもと関わることを躊躇させる影響要因, 日本看護研究学会雑誌33(2)：69—76, 2010.
- 6) 猪股昌子：看護学生と受持ち患者の人間関係形成過程とその要因, 日本看護学会論文集看護教育30：145—147, 1999.
- 7) 野村佳代：小児看護学実習における学生と母親の信頼関係に及ぼす影響要因の検討—学生と母親の言動と実習記録の分析から—, 日本赤十字看護学会誌4(1)：106—114, 2004.
- 8) 江本リナ, 飯村直子, 伊藤久美, 安田恵美子, 阿部さとみ, 長田暁子, 込山洋美, 筒井真優美, 渡部真奈美, 福地麻貴子, 小村三千代：看護系大学における小児看護学実習の準備と実際, 日本小児看護学会誌10(1)：59—63, 2001.